

目次

I 稲のきた道	1	IV 墓地—伝統と新来の墓制—	23
1. 最古の弥生土器—北部九州—	1	1. 伝統的な墓制	24
2. 弥生文化のひろがり	2	1) 土坑墓	25
3. 信濃の夜明け	3	2) 再葬墓	25
II 新しい文化と技術	9	3) 土器棺墓	25
1. 稲作の定着と発展	9	2. 新来の墓制	25
1) 水田	9	1) 甕棺墓	26
2) 石の農具	11	2) 方形周溝墓	27
3) 木の農具	12	3. 組合せ式箱形木棺墓	28
4) 河岸段丘と陸耕	14	—伊勢宮遺跡における新来の墓制—	
5) 米とその他の植物質食料	16	1) 木棺の種類	28
2. 石の工具と木工技術	17	2) 伊勢宮遺跡における木棺墓	30
3. 鉄の道具	20	3) 埋葬の方法	32
4. 織布技術	21	4) 木棺副葬品	34
III 豊作の神とまつり	22	5) 死因	36
1. 青銅器による祭祀	22	6) 複数の埋葬	37
1) 銅鐸	22	7) 長野県内の弥生時代木棺	38
2) 武器の形をした青銅器	22	4. 墓への副葬品	40
2. 石でできた武器形の用具	23	5. 母なる形の骨壺—容器形土偶—	42
3. 豊作を占う骨	24		

例言

1. 本書は第16回企画展「稲を伝えた人々」の展示解説として作成しました。
2. 紙面の都合で、展示資料のうち割愛させていただいたものも多く、ご好意に添えなかった失礼をお詫びいたします。
3. 本書を作成するにあたって、多くの書籍から図や表を転載させていただきました。〈文〇〉で出典の文献を番号で記しました。
4. 本企画展は昭和60年に調査した長野市篠ノ井塩崎遺跡群伊勢宮遺跡の弥生時代中期初頭の墓制を中心に展示構成したものです。
5. 本書の解説執筆は山口明、図版作成・編集は大蔵満・安室知・中島龍吾・奈須野由美が担当しました。

第16回企画展

「稲を伝えた人々―その生活と墓制―」開催にあたって

長野市立博物館は、昭和56年秋開設以来、常設展示「長野盆地の歴史と生活」の主題を補う意味で、年3回の割合いで企画展示を開催して来ました。その内容は、歴史・民俗の両部門にわたり、歴史の分野については、考古学の研究成果を、毎年1回ずつの割合いで発表して来ました。

それは、昭和57年の「はにわの世界」、58年の「シナノから科野の国」、さらに昭和59年には、「縄文人のくらし」と、日本の原始時代の移り変りを、長野県内はもとより、広く国内の代表的な資料を展示する中で、長野盆地での人々の生活の位置づけをして来たところでした。そして、昭和61年から新たな研究成果として、長野市内から出土した遺物や、遺跡の特徴などを中心にした展示を始め、昨年は「鏡の文化」を取り上げ、弥生時代から現代までの鏡の変遷と、現代科学の中で果たした鏡の役割りまでを発表して来ました。

今回の「稲を伝えた人々」は、昭和60年秋当館学芸員が中心となって発掘した、長野市篠ノ井塩崎、塩崎遺跡群のうち、かつて伊勢宮遺跡として周知される地域から出土した、弥生時代中期の遺構を中心に、その生活と墓制を取り上げて研究した成果を発表するものです。

弥生文化は、一般的には北九州を中心にした地域から近畿・東海地方まで波及するに、おおよそ100年が経過し、さらに、中部から関東地方にかけては、その後の長い期間が経過したとされて来ました。

ところが、最近の数多い報告の中には、前期的な色彩の濃厚な、いわゆる遠賀川系の土器の分布が、遠く東北地方にまでも及び、その波及の様子が一様でないことが分かってきました。その中であって、前記伊勢宮遺跡からも、遠賀川系の土器の出土を見、その上、東日本にあっては初めての発見とも言える、木棺墓と、複数の遺体を葬った木棺墓さえ発掘されるにいたりしました。

そして、細部にわたる専門分野の研究の結果が当館に寄せられる中には、大腿骨に、異質物が深くつきささった状態で葬むられていたことも分かりました。

これらの結果は、更に慎重に研究が進められなければなりません、中間的な意味で、今回の企画展での発表となったものです。

この展示に当っては、県内の弥生文化研究の先生方はじめ、東京国立博物館、東京大学・明治大学の諸研究機関はじめ、県内各市町村の教育委員会および、研究者のみなさんの絶大なるご協力を賜りました。ここに感謝の意を表すとともに、ここから続く新たな研究成果に御期待いただくことを希望いたします。

長野市立博物館長

掛川一夫